研究のエコシステムと評価：
人社系研究の評価に関する論点地図ver.2へ向けて

○藤川二葉[1]（fujikawa@kura.kyoto-u.ac.jp）, 佐々木 結[1] , 押海 圭一[2], 新澤 裕子[3],平澤 加奈子[4]
（1. 京都大学学術研究展開センター, 2.人間文化研究機構, 3. 東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室,
4. 東京大学史料編纂所）

概 要

2022年9月、人文社会科学系URAネットワークは、URAと研究コミュニティの間で公正で責任ある研究評価についての認識を高め、対話の場を作ること、またこれまでに蓄積されてきた議論を踏まえ、堂々巡りに陥らずに一歩踏み出すことを目的とし、助成金DORA Community Engagement Grantsを得て「人文・社会科学系研究の評価に関する論点地図Ver.1」を作成した。
本ポスター発表では、URAを中心とした様々なアクターから地図へのコメントを収集し、その過程で得られた「この地図の活用方法を提示すべき」というコメントに応じURAによるユースケースの例をあわせて記載した。さらにポスター発表会場で参加者にもコメントを追記してもらうことで、地図のバージョンアップに向けた対話の場をポスター上に作り、議論のネットワークを広げるとともに、研究のエコシステムを豊かにする評価に向けた方策について考察する。

背 景/問題提起

容易な回答が得られない人社系研究評価の議論では、堂々巡りに陥りがちである。2023年1月、人文学・社会科学特別委員会*がいわゆる「人社モニタリング指標」に関する検討結果をまとめた。あくまで研究評価指標という位置づけではないと断った上で、「人文学・社会科学分野の研究活動を一定程度可視化し、関連する政策効果の測定を図る」目的で、国際・国内ジャーナル論文等（学会誌、大学紀要を含む）、プレプリント、書籍などがモニタリングの対象とされた。その後、これまでデータが十分に蓄積されて来なかった書籍について、把握手法が模索されている。しかし、そもそも政策効果を測るのに、論文や書籍といったアウトプットを追うことが効果的なのか。可視化することが目的の一つであれば、定量的な指標にこだわらず定性的な指標もあり得たのではないか。これらの指標によるモニタリングが継続した場合、研究のエコシステムに不均衡が生じないと言えるだろうか。疑問が生じたときに立ち止まって考えるヒントが、この地図に散りばめられている。

*文科省科学技術・学術審議会 学術分科会人文学・社会科学特別委員会

会場のあなたのコメント、ツッコミ、入れてください！

人社に限らない論点になっていて、かえって人社特有の課題は埋もれている印象。(URA)

どういうコンセプトでこの地図が作られたのかが分かりにくい。(URA)

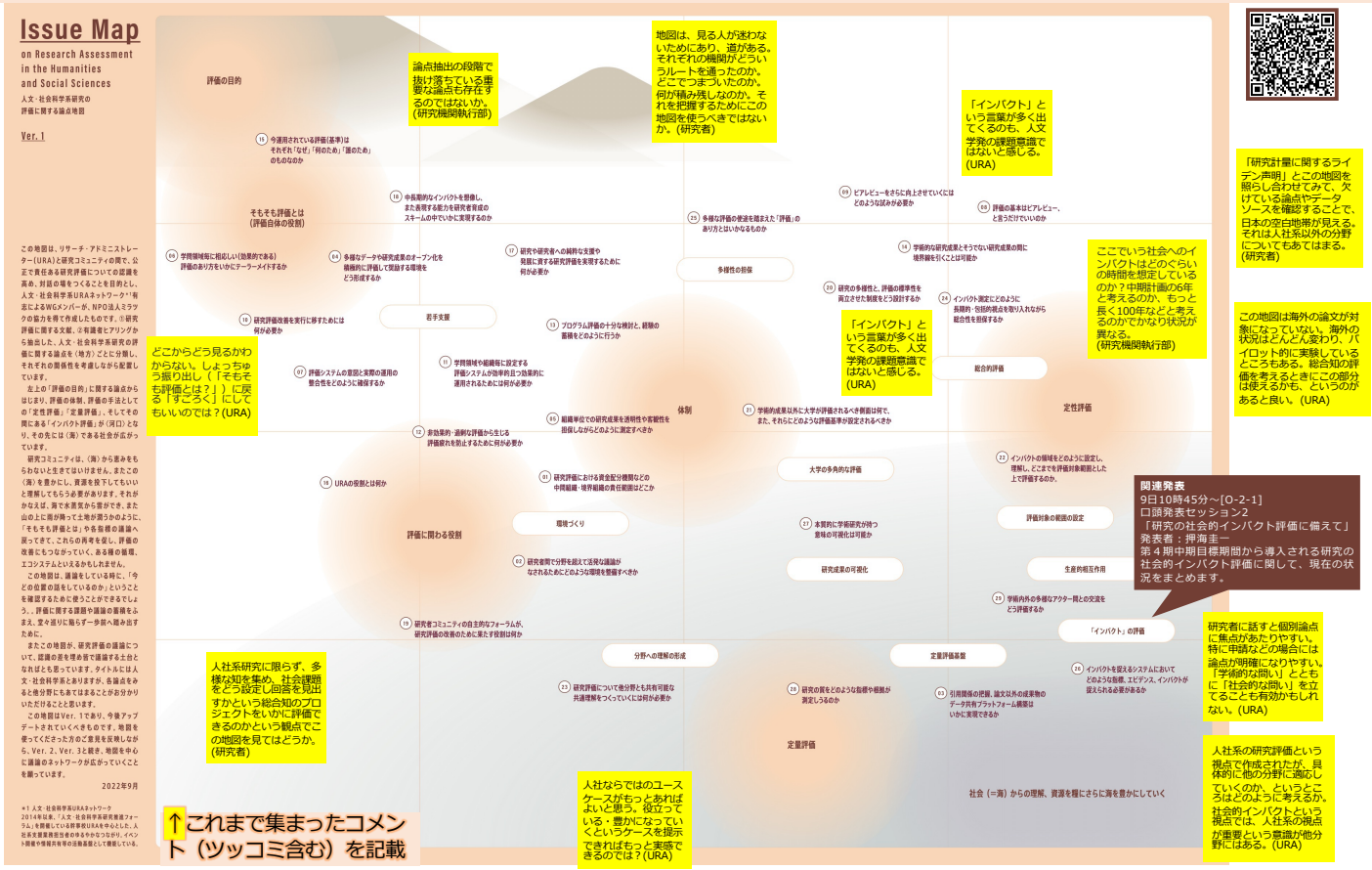
評価の研究の論点はこれで尽きていると思う。問題は、これをどのようにしていくか？(URA)

評価の論点整理だけでなく、理解醸成のための取組があるとよい。(URA)

ドメスティックな評価なのか、国際的な評価なのか。(URA)

「大学の現場に降ってくる評価のニーズに対応しているとどうしても視点が偏る。一歩引いてみることで俯瞰できる。(URA)

2次元マップにする必要はあったのか？2軸を設定できなかったのか？(URA)



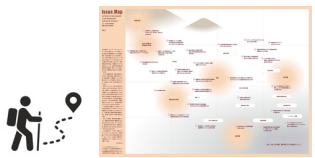
「研究計量に関するライデン声明」とこの地図を照らし合わせてみて、欠けている論点やデータソースを確認することで、日本の空白地帯が見える。それは人社系以外の分野についてもあてはまる。(研究者)

この地図は海外の論文が対象になっていない。海外の状況はどんどん変わり、パイロット的に実施しているところもある。総合知の評価を考えるときにこの部分は使えるかも、というのがあると良い。(URA)

地図のユースケース（この地図、一体どう使う？）

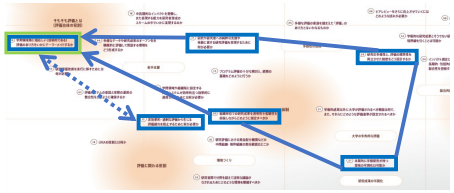
ケース①新米URAの場合（例）

URAとして着任してまだ日が浅い。定量的評価では人社系研究が適切に評価されないという問題があり、それは研究の発展にも関わる重要なことで、どうやら色々な議論がすでに行われているようだ。研究支援者として自分は一体何ができるのだろう…？それを考えるためにも、まずは全体像を把握したい！



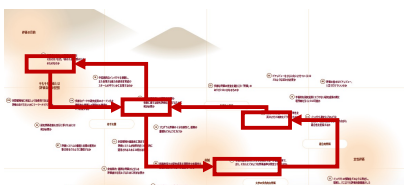
ケース②部局URAの場合（例）

部局における評価は外から求められて作成する場面が多く、「受動的」になりがち。さらに、評価観点が依頼元により異なることが作成業務の煩雑さを招くことに…（泣）。部局側が主体的に自分たちの強みを評価に位置付けると何かが変わる…かも？



ケース③本部URAの場合（例）

…論点を並べたことで、組織の議論になじむ/なじまないものが何となくわかった。「何だったら定量的に見ることができるか？」に終始しがちな組織の議論を、戦略的に進めるための道筋設計や確認に使えるかも…？（以下は例）



考察・これからの課題

俯瞰図としては一定の価値が認められつつも、日々の業務の中で、考えを整理し行動に結びつけるのは容易ではない。ユースケースを増やしつつ、研究のエコシステムの1つのツールとして、より使いやすい形へ、論点の精査と充実が必要。「責任ある測定（Responsible Metrics）」の5原則の1つ、「省察性」(Reflexivity:指標がもつ潜在的かつシステム上の効果に応じた更新）が示唆するように、目標を見失わず容易に結論を出さず省察を促すものへ。